

埋蔵文化財発掘調査成果速報

(都市計画高井戸公園整備予定地)

調査要項

遺跡名 : 向ノ原遺跡 (杉並区遺跡番号 76)
主要な時代 : 旧石器、縄文
調査年次 : 第3次
所在地 : 東京都杉並区久我山二丁目地内
調査期間 : 平成29年7月～平成30年10月末
調査面積 : 8,410 m²
調査主体 : 公益財団法人東京都スポーツ文化事業団
東京都埋蔵文化財センター

遺跡と調査概要

向ノ原遺跡は、井の頭池を水源とする神田川上流部右岸の急崖な台地縁辺部、武蔵野台地武蔵野面に位置し、井の頭池からは約3km下流です。本遺跡は、過去2回の発掘調査が行われており、発掘調査の成果から、後期旧石器時代後半期(約24,000年前)と縄文時代草創期(約12,000年前)～中期(約5,000年前)にかけての遺跡であることが明らかにされています。特に縄文時代早期前葉(約10,000年前)の土器や石器がまとまって出土しています。

今回の調査は第3次調査として、都市計画高井戸公園整備事業に先立って記録保存を目的としています(図1)。発掘調査は、平成30年10月末日までに行い、その後は報告書作成に向けた整理作業を平成32年3月まで現場事務所内で行います。

今回の調査で発見された遺構・遺物の概要

平成29年度は7月から調査を開始して、年度末までに敷地東側の約5,000 m²の面積を調査しました(図1, 2)。

後期旧石器時代 ナイフ形石器や削器、彫器といった後期旧石器時代後半期(約24,000年前)を代表する石器が立川ローム層Ⅲ～Ⅴ層から複数出土しました。

縄文時代 早期前半(撚糸文・条痕文期)の竪穴住居跡・炉穴(屋外炉)、中期(加曾利E式期)の竪穴住居跡が検出されました。遺物としては、撚糸文土器を中心として押型文、沈線文、条痕文土器といった縄文時代早期前葉を代表する土器が見つっています。石器は、石斧・スタンプ形石器・石鏃が多数出土しています。

中世 調査区東側から南北に横断する幅約2mの溝が検出されました。土橋が残されています。溝からは15世紀末ごろの常滑焼の破片が出土しています。

近代 近代に入ってから作られたと考えられる地下坑を複数基確認しました。本遺跡には太平洋戦争末期に「久我山高射砲陣地」が設置されていましたが、今回の調査では、今のところ高射砲が設置されていた場所を特定するような遺構は確認できていません。

※記載内容は、現場段階での所見のため、変更になることがあります。

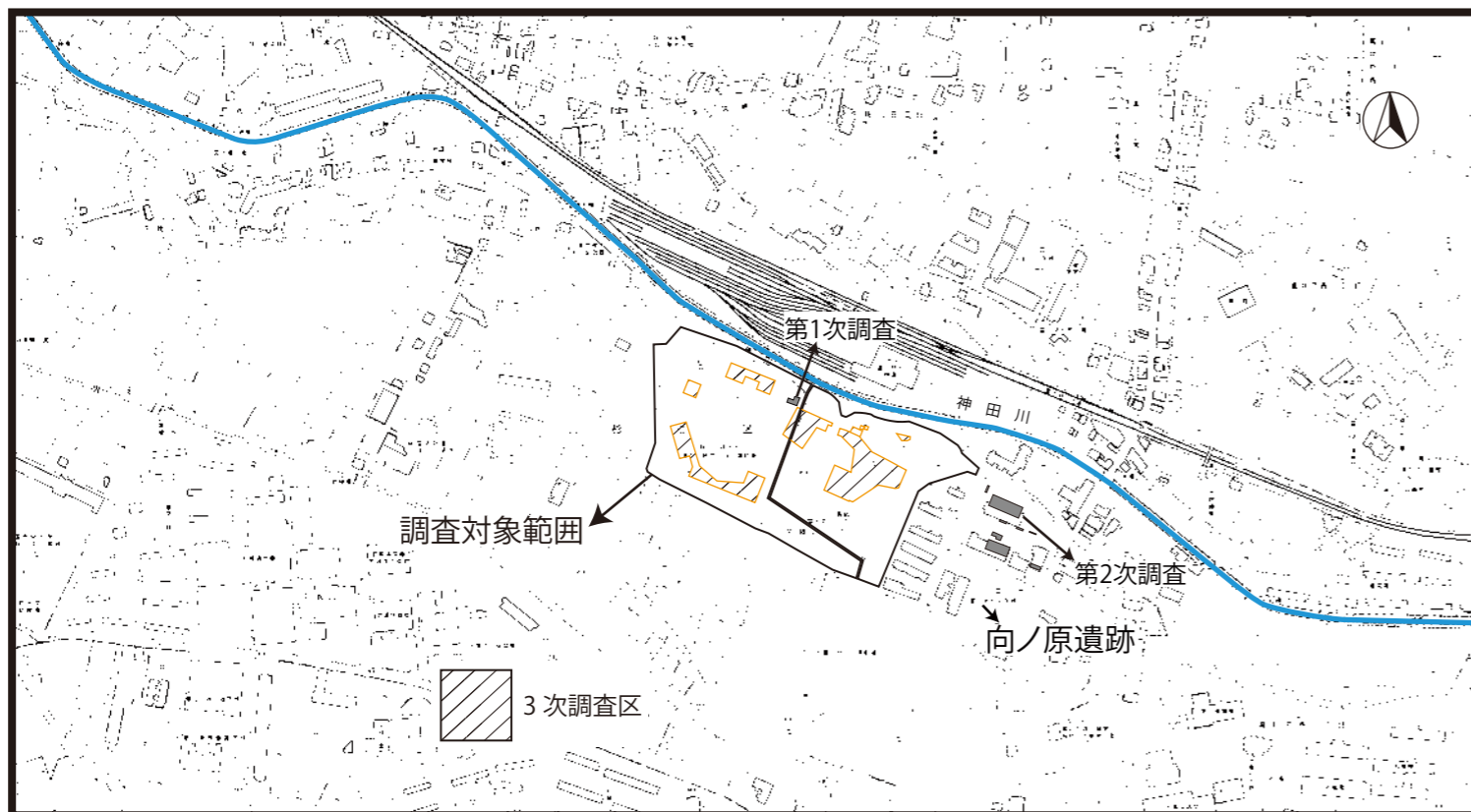


図1 向ノ原遺跡の位置と発掘調査区

遺物の紹介

平成 29 年度の発掘調査で出土した遺物は、現在整理作業中です。今回は、そのなかから時代ごとに代表的な石器や土器を紹介します。

遺物は、発掘調査区全体（図 2）から出土しました。また、立川ローム層からも遺物の出土を確認できたことから本遺跡は、旧石器時代から縄文時代にかけての遺構・遺物が良好に残されていることが明らかになりました。これは、遺物が埋まっていた土が現代までに大きな開発を受けることなく残されていたことが大きな要因だと思われます。

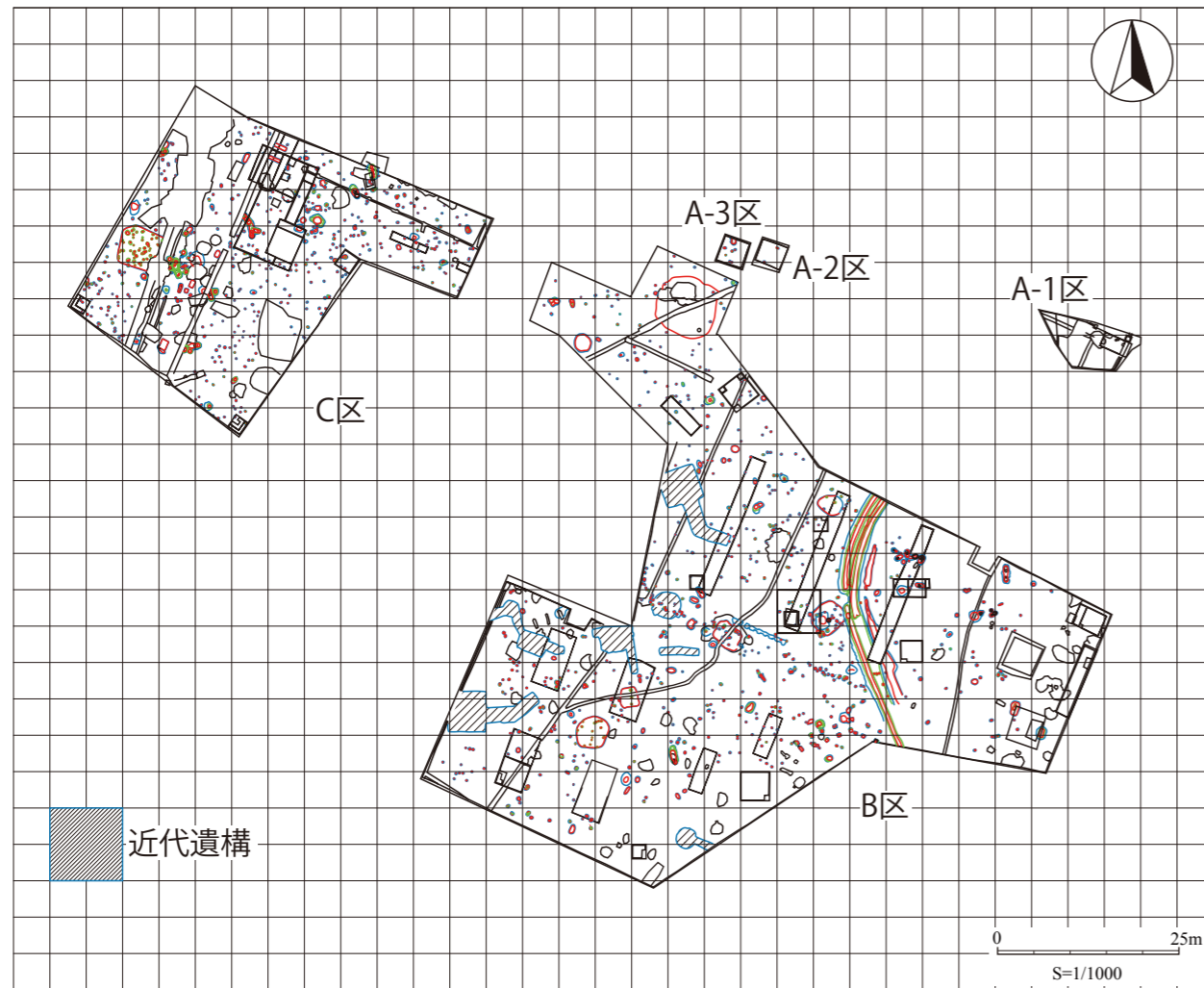
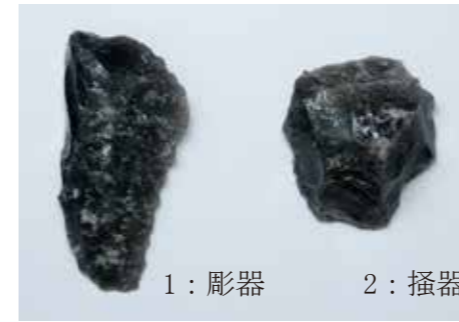


図 2 H29 年度調査区と遺構配置図

後期旧石器時代後半期の石器



立川ロームIV層から出土した黒曜石製の石器です。黒曜石は、東日本では旧石器時代を通して多く使われた石材です。写真の石器は、皮なめしや木、骨角の加工に用いられた道具と考えられています。

縄文時代の石器



石鏃：石製の鏃です。
矢の先端に装着して
狩りに使っていました。



尖頭器：槍先として使
われた狩猟具です。



スタンプ形石器：
木の実などを砕くのに
使用したと考えられて
います。



石斧：
石製の斧です。木を切
るのに使用するほか土
掘り具として使われた
と考えられます。

縄文時代の土器



縄文時代早期前葉（約 10,000 年前）



縄文時代中期（約 5,000 年前）

※遺物の縮尺は任意です。



B区北側全景（北から撮影）

① 溝状遺構



中央部には土橋が残されていたことから区画溝として掘られたものと考えられます。溝の底部からは常滑焼が1点出土していることから中世の遺構であると推測されます。

③ 近代地下坑

地表面下2～2.5mまで掘り下げた地下坑がB区の中央部から4基検出されました（図2）。時期を示す遺物の出土はありませんでしたが、遺構の覆土が新しいことから近代に作られたと考えられます。



B区西側全景（南から撮影）

② 3号竪穴住居跡（SI03）

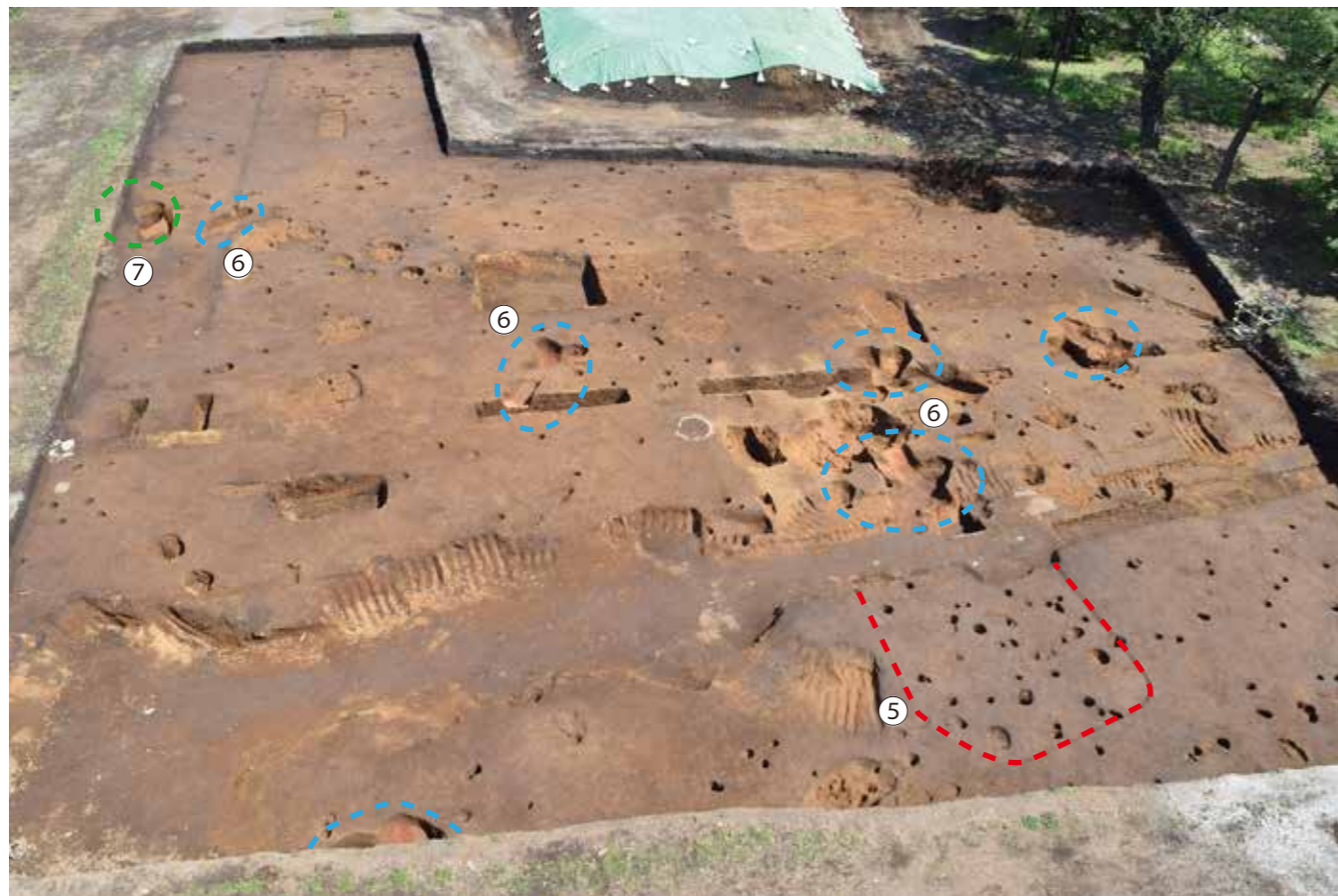


縄文時代中期後葉（約4,500年前：加曾利E3）の住居跡です。中央部の炉を取り囲むように大形の礫が出土しました。

④ 6号竪穴住居跡（SI06）



縄文時代早期前葉（約10,000年前：撚糸文）の住居跡です。長径が約8mと大型で都内では2例目と大変珍しい住居跡です。



C区全景（西から撮影）

⑤ 8号竪穴住居跡（SI08）



縄文時代早期後葉（約9,000年前：沈線文・条痕文）の住居跡です。住居跡の周辺からは炉穴が複数基検出されています（⑥参照）。

⑦ 落とし穴



縄文時代の落とし穴です。深さは約2.5mで底に行くほど穴の幅が狭くなっています。狩猟に使われたと考えられています。

⑥ 炉穴



炉穴は、屋外炉ともよばれ楕円形の穴の一端に火を燃やした痕跡（写真の赤く焼けている部分）が残っていることが分かります。例外はありますが縄文時代早期の集落は炉のない住居跡と炉穴で構成されることが多いです。一般的に炉穴は、縄文時代早期前葉の燃糸文土器の時期に関東で出現し、後葉の条痕文の時期に見られますが早期のみで消滅し、以後の炉は住居内に作られるようになっていきます。